

## 2. 西経漁場を中心として

吉 成 照 夫 (大洋漁業株式会社)

### 1. 西経漁場の操業概況

最近の北鯨は18次、19次と西経漁場における操業の比重が増大しているので、この20次においても相当の捕獲量が期待されたので早くから調査船を派遣して巾広く調査したが、操業の初期においては殆んど発見がなかった。

#### 1) 第1回西経操業

第2回南丸は3船団の中最後に漁場に到着して5月21日に西経漁場に入った。165°W附近まで東進後反転して5月29日迄9日間操業したがナガス1、イワシ13、マツコウ51の捕獲があっただけである。

#### 2) 第2回西経操業

第2回南丸及び調査船の状況からその後3船団とも東経漁場の反復操業を続けたが、6月下旬になると水温の上昇と共に東経漁場のイワシクジラも分散し纏まった発見がなくなったので、漁場の転換が必要となった。その頃丁度大きな高気圧が移動して来たので、6月末からこれに乗って3船団とも東進を開始することになった。

19次に実績のあった170°W~160°Wは連日ガスという悪条件もあったが、ひげくじらはさっぱり見えず、僅かなガスの合間に大マツコウを捕獲することが出来た。10日間に亘る東進の後140°Wに至って漸くイワシクジラ群を発見したが、3船団で4-5日操業するとたちまち漁場は涸れてしまい、1週間後には2回南、3極洋とも反転し西進を開始した。3日新だけはこの漁場に残留し、反復操業して新しい鯨の回遊を待ったが、天候が悪化したので、7月17日から大陸沿いに北上した。

アラスカ湾の奥では僅かにナガスクジラを捕獲したが、ひげクジラは極めて少く中小マツコウばかり多かった。その後アラスカ湾の南部に於いて時にナガス、イワシクジラの群を発見したが、ガスの日が多くて捕獲が進まず8月17日164°Wにてひげクジラ漁を終了した。

一方2回南、3極洋船団も西経漁場を西進中は捕獲少く、150°Wと170°Wにてイワシクジラを僅かに捕獲出来た。2回南は其の後ベーリング海東部においてナガスクジラ85頭を捕獲した。

3) 西経漁場におけるマツコウは、各船団とも大マツコウを主体に捕獲したが、140°W線を境界に東側は中小マツコウ西側は大マツコウと大別されている模様である。東側の中小マツコウは今年も発見が多かったが選別して捕獲を制限した。ひげクジラ終漁後昨年大マツコウの実績漁場160°W~170°Wを狙ったが今年は殆んど発見がなく、3船団ともマツコウの捕獲枠を取残した。

## 2. 本年度西経漁場の特徴

昨年度の捕獲実績と比較すると

	ナガスクジラ	イワシクジラ	マッコウクジラ
19次(昭45)	302	2,022	1,909
20次(昭46)	287	678	1,168

以上の如くイワシクジラとマッコウは大巾に減少、特にイワシクジラは3分の1に激減した。此の減少の原因を完全には把握出来ないが今次的特徴として

- 1) 西経漁場の冷水が強く後まで残って水温の上昇が遅れた。特に北米大陸沖のアラスカ海流が弱く、むしろ西経中央部の150°W附近が昇温して例年と逆の現象が見られた。
- 2) 今年の西経漁場はガスが多く操業日数の約30%に及び、充分な調査操業が出来なかった。
- 3) 18次、19次と2年連続西経漁場のイワシクジラを集中的にたたいたので資源的にも大きな影響を受け、又回遊の経路も変わったのではないか。

以上の様な理由から今年の西経漁場はイワシクジラの発見が特に少かったものと考えられるが、今後共相当程度の困難さは続くことが予想される。

## 3. 北洋捕鯨漁場と海底地形

町田三郎(鯨類研究所)

要旨 北西太平洋をほぼ南北に縦走する北西太平洋海嶺(天皇山海嶺)周辺水域に鯨類特にイワシクジラの好漁場が形成されており、この海嶺が漁場の形成要因の一つになっているのではないかとと思われる。現在解析に必要な資料を収集し、解析を進めている。参考までに、1952年から1971年までの東経域におけるイワシクジラの捕獲分布(100頭以上)と大体の北西太平洋海嶺の分布位置を図示した。